

環境のミカタ株式会社

主な事業内容…廃棄物・資源リサイクル事業、廃棄物・資源物流事業、未来エネルギー供給事業など
本社所在地…静岡県藤枝市 創業…1975年 従業員数…176人

業界イメージを刷新。 「人が集まる」モデルケース



入り口の右手には、ゆったりとしたソファ席が用意されている。社内に多く飾られているアート作品は、渡辺社長が自らセレクトしたもの。カフェやホテルのような雰囲気を味わえる



受付前では、環境のミカタのマスコットキャラクター「ミカタくん」がお出迎え。いたる所に置かれた観葉植物は、フェイクではなくすべて本物。ドイツから取り寄せた特殊な土を使い、手入れに手間がかからないようにしている

廃棄物処分や資源リサイクル事業などを手がける環境のミカタ。そのオフィスは都心のIT企業さながら、開放的な空間に風通しの良い社風を感じる。

同社は2021年から段階的に新オフィスへ移転した。重視したのは「駅の近く」で「働きやすい空間」であること。その背景には、採用への強い思いがあった。

「廃棄物を取り扱う私たちの業界は、昔ながらの引き出しがついたグレイの事務机が並ぶ『事務所』に、女性には制服、男性は作業着というイメージが強い。そのため、若手はなかなか集まりません。誰もが『ここで働きたい』と思うオフィスにしたいと、以前から考えていました」

そう語るのは、環境のミカタの渡辺和良社長だ。新オフィスは最寄り駅から徒歩約5分。駅から遠く、車通勤が必須だった旧オフィスとは異なり、今は電車通勤の社員もいる。もともと物流倉庫として使われていた建物を同氏が気に入り、3年かけて入札。存在感のある外観はそのままだに、内部を働きやすい空間へと改装した。「世界に1つしかないオフ

イス」をコンセプトに、「緑をあしらうこと」と「徹底的にペーパーレスにすること」を意識したそう。

「緑があると落ち着くのはもちろん、当社の事業も環境に関わるので、そのイメージをオフィスにも落とし込んだのです。ペーパーレスは以前から進めていましたが、今ほど徹底はできていなかった。現在は一部を除き、書類はほぼすべてデータ化したので、書棚にもゆとりがあります。

フリーアドレスで机も広々使えるようにして、圧迫感をなくしました。産廃業界でここまでやるのは珍しいかもしれませんが、従来の印象をひっくり返すような、刷新されたイメージを押し出しています」

間接的な投資を惜しまず 「働きやすさ」を重視

新オフィスの構想は渡辺社長とデザイン会社のみで進め、社員にはサプライズだった。完成したオフィスを見た社員からは、驚きと喜びの声があがったという。環境のミカタは創業当初、社員5名で約10坪の事務所だった。そこから事業拡大に合わせて移転を重ねる一方で、時代と



イスや壁の少なさなど、細かなところまで社員の働きやすさと雰囲気の良さを追求していると語る渡辺社長

フリーアドレスの執務スペースは床から一段上がっており、コード類がきれいに納められている。イスはすべて高機能なオフィスチェアで、疲れにくく仕事がかどると社員からも好評だ



女子トイレの洗面台には、明るい白い光が顔に当たる「女優ライト」を設置。「仕事を終えたら、ここで身だしなみを整えて、街へと繰り出してほしい」と渡辺社長は微笑む



靴を脱いで足を伸ばせる、畳敷きのリラクゼーションスペースも完備。クッションや、膝上にパソコンを置くためのツールも用意されており、ここで仕事をすることも可能



2階に上がる階段の壁に書かれた文字は、企業理念「できることは、もっとある」の英訳。このフレーズは収集車にも書かれている

昼食時には、オープンキッチンのカウンターが社員でにぎわう。モニターからは音楽が流れ、渡辺社長の提案でアクアリウムも置かれている、癒やしの空間である



新しいオフィスには、藤枝市長をはじめ、地元企業からの見学者も多く訪れるそうだ。環境のミカタは、地域に人を集めるモデルケースとしても機能している。

「オフィスへの投資は事業設備への投資と異なり、売上などに直接的には結びつかない。けれども、オフィスをないがしろにしては、人は集まりません。当社はドライバーの制服デザインも一新しました。そうした間接的な要素を整えることで、ここで働きたい」という人材が集まり、事業にも好影響を与えるでしょう」

実は現オフィスに移転する前も、おしゃれなコンテナハウス風の社屋を構えており、十分きれいだった。だが手狭になったことに加え、より新しいことに取り組んで、最先端のオフィスをつくるのが、自社のブランディングにも大きく寄与する考えたのだ。都心のベンチャー企業を見学するなどして、これまでにない空間が完成。今では、特に女性からの応募が増え、採用にも手応えを感じていると同氏は微笑む。

もに人手不足も深刻化。渡辺社長が特に悩んでいたのが、若手採用だ。いかに人材を獲得するか、若手社員の意見を聞いていく中で、働きやすい空間の大切さを感じたという。